My Days in NIUE Island

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3786

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

南海遊録―ポリネシア ニウエ島フィールドノート―（1）

My Days in NIUE Island

馬　場　優　子

赤道と南回帰線の間、日付変更線を東側に越えたところにサンゴ礁が垂直に隆起した小さな島が浮かんでいる。地理的にはサモア諸島、トンガ諸島、クック諸島にかこまれた地域に存在するのだが、諸島を形成していない小島であるため地図上では表記されていないことが多い。この南海の孤島といった風情の島は現在ニウエ島と呼ばれている。

19 世紀半ば以降、ロンドン伝道協会によるキリスト教化が進み、20 世紀になるや否や大英帝国の、そしてまもなくニュージーランドの保護領となったこの島は、第二次世界大戦後、国際連合の植民地撤廃政策により南太平洋の多くの島嶼社会が陸続と独立国となってゆく中でようやく 1974 年に内政自治権を得てニュージーランドの自由連合国となった。

筆者は 1993 年にこの島で 2 週間の General survey を行った後、翌 1994 年 9 月から 1995 年 8 月までの 1 年間、ニュージーランド　オークランド大学人類学部客員研究員としてオークランドとこの島を数ヶ月ずつ行き来し、フィールドワークを行った。1996 年以降は連年あるいは隔年に同島を訪れ、1 ヶ月ないし 2 週間、落穂拾いを行ってきた。本稿は 1994 年から 95 年にかけてのフィールドワークにおいて、インタビューその他フィールドノーツに記録したこと以外の、日々の感想を書いた日誌にもとづくものである*。

面積にしておおよそ奄美諸島の徳之島ほどのこの島は周囲が激しい波風に洗われ、平均約 30 メートルの切り立った断崖を成している。その外周は岩礁（リーフ）にかこまれ、外部から容易に接近できない。浜辺といえるものは一ヶ所にあるのみである。

内陸部は風化したサンゴ礁の上に熱帯雨林、疎林、潅木林（ブッシュ）

潅木林のタロイモ畑

を形成し、土壌がきわめて薄くて肥沃とは程遠いが、島民は疎林帯と潅木帯を利用してタロイモ、ヤムイモ、キャッサバ、バナナ等の焼畑耕作を行っている。季節は相対的に気温の低い乾季（4 月～11 月）と高温多湿の雨季（12 月～3 月）から成る。通常の穏やかな天候のもとでは根茎類は樹木の伐採、種イモ植え、除草という農作業のプロセスを経て収穫するが、ココヤシ、バナナ、パンノキの実、パパイアその他、多種類の果実類は特別の労働投資をすることもなく充分に収穫できる。しかし雨季には島はしばしばサイクロン（熱帯低気圧）に襲われ、農作物ばかりか家屋も甚大な被害をこうむることがある。引き続いて旱魃を伴うことも多く、島は深刻な飢饉に陥る。最近はおおよそ 10 年間隔で壊滅的な被害をもたらす巨大なサイクロンに見舞われている。

農作物はもっぱら自家消費用もしくは島内消費用であり、輸出農作物はわずかのタロイモのみである。他に国家として経済的自立を可能にする産業もなく、歳入の半分はニュージーランド政府からの援助に頼っている。自由連合協定によってこの島は財政、司法、外交、防衛に関してニュージーランドの傘のもとにあり、サモアやトンガなどの独立国と比べれば生活程度が相対的に高く、島民はそれを享受している。また島民はニュージーランドへの入国及び出国に際してビザを必要とせず、現在約 2000 人の島在住島民の 6 倍のニウエ人がニュージーランドに居住している。彼らも、またニウエに住んでいるニウエ人もニュージーランドと島をさまざまな機会に行き来している。

＊文中の固有名詞に関して、公職にある人々の氏名以外は事柄の性質上、仮名としたことをお断りしておく。

1994 年 9 月 16 日（金）

Air Nauru 934 便にてニュージーランドのオークランド空港を出発。今回は運のよいことにニウエ島のアロフィ空港までの直行便がある。9 時発の便なのに時間が来てもなかなか出発しない。ニウエ人たちが大荷物をいくつも抱えてのんびりやって来る。遅くなったのに機内に入ってからも悠然と挨拶を交したり、立ち止まってしゃべったり、笑い合ったりしながら通路を進んで来る。急ぐ様子は全く見られない。中央通路の両側に三人掛けの座席が 21 列ある、120 人乗りの機体の乗客の半数くらいがパランギ（外国人。実質的にはヨーロッパ白人を指している）である。彼らにも苛立ちや焦りは見えない。結局、飛行機は 20 分遅れで出発した。昨年のサモアの時よりはよい。

隣席はニウエの農林水産・産業・郵便通信・公共事業副大臣のタウフィトゥ氏であった。この島の政府高官たちは頻繁に公務で国外旅行をしているらしい。この 1 年間の島の変化について訊ねてみたが、あまり変化もないようだ。機内はニウエ人たちでもりあがっている。「イーッヒッヒッヒ」というあの独特の笑い方。これも懐かしい。

3 時間でアロフィ空港に到着。途中、方位磁石を見ていたら、初めの 1 時間は真北に進み、次の 1 時間は 20 度北北東に、最後の 1 時間は 10 度北北東に進んだ。

空港と言っても潅木林を切り開いた野原である。タラップを降りて空港の小さな建物まで歩いて行く間にむせ返るような緑の樹木や草木の匂いに包まれる。これがこの島の歓迎の挨拶なのだ。週 1 回の島外との接触の時である飛行機の飛来日はお祭りのようだ。どの家族も総出で小型トラックやバンに親戚一同乗り合わせ、用のある人もない人も来ている。みな飛行場の金網にしがみついて、行く人、来る人を見ている。

1994 年 9 月 17 日（土）

数日間はこの島唯一の首都アロフィにある政府経営のホテルに宿泊することにした。ホテルのマネージャーはニュージーランド人のアネット＆リッグ夫妻だがレセプションもウェイトレスも兼務する女性、コック、清掃人などみなニウエ人である。

朝からマイクロバスでホテルの宿泊客みなで島内一周観光に出かけた。この週の宿泊客は、イギリス人のバーバラ＆ケヴン夫妻、ニュージーランドか

ら来た中年のスー夫妻とキャロル夫妻、幼い子を連れたアン夫妻、老年の非婚カップル、それにオーストラリアから来たマスコミ研究者ヘレン、先週から泊まっていたニュージーランド人夫婦（この妻はツアー・バスの中でもずっと小説を読んでいた）、それに私であった。ガイド兼運転手は昨年知り合った地元のレイチェルだ。彼女は去年はホテルのウェイトレスだった、というと、パランギたちは「それはかなりの出世だ」と感心している。

昨年と比較して感じる違いは、自治政府が観光事業に力を入れ始めたことである。観光業者がいずれも零細規模ではあるが昨年の1社から3社に増え、レンタル自動車店が昨年は1軒だったが今やイタリア人のサバティーニ夫妻もドイツ人のホフマン夫妻も参画した。モテルも6軒になった。そしてなによりも、島中の話題になっているが、ブッシュを後背地に海岸線の際に大規模なリゾートホテルの建設計画が進んでいるという。しかし、宿泊施設をいくら増やしても外部から人を運び込む大型機の離発着ができない飛行場では不備で、自治政府は飛行場の拡大をニュージーランド政府に働きかけている。この島の現政府は観光によって島の経済的基盤を作り上げる政策をとり始めているようだ。

犯罪率が上昇している。特に、飲酒による暴力沙汰と交通事故が増えているという。飲酒問題は思ったより深刻だ。ホテルのバーでも昼間から常に3人くらいの地元の男が飲んでいるし、午後4時にはにぎやかに大声で笑う声が聞こえてくる。それはだいたい夜の10時過ぎまで続く。金曜日や土曜日ともなれば夜11時ころまでにぎやかだ。先週、酔った勢いで殴り合いが起こり、警官が呼ばれた。検挙された男は、家に帰ると妻を殴るからと3日間留置場に入れられたという。彼の公判が10月にニュージーランドからディロン判事を迎えて行われる。

昨年8月に来たときにはあったAir Polynesianの（クック諸島）ラロトンガ―アロフィ―（サモア諸島）アピア間の飛行便は9月初めになくなった。飛行機の車輪を格納する部分に隠れて密航を企てたサモア人青年が離陸時に潰されて死亡し、飛行機も使い物にならなくなったのだそうだ。これでAir Polynesianはかなりの痛手をこうむり、その後、このルートの便は再開されていない。

1990年のサイクロンOfaの被害状況を写真で見た。ホテルは構造部分以外はすべて飛ばされてしまった。村々の教会でも土台しか残らなかったところがある。サイクロンのシーズンはほぼ10月から2月の間だとアネットは言う。大変だ、そろそろそのシーズンではないか。そういえば強風や雨の日ばかり続いている。

パランギたちの夕食は遅い。8時くらいに漸く始まる。まず食前酒をゆっくり飲んでからおもむろに食事となる。電燈をほとんど消してろうそくを点し、人の顔が判別できないほどの暗さの中でおしゃべりしながら食事をする。これに付き合うのが私には最も辛いことだ。だいたい、自分が口に入れるものの姿は目で見て確かめたいではないか。それに日本人にとってろうそくはお食事よりもお葬式に似つかわしい。しゃべりながら食事をするのも苦手だ。我々は食べながらおしゃべりはせず、静かに、お行儀よく、としつけられている。以前、滞米中もこれには苦労したが、ここでも骨を折る。白人達はおしゃべりと食べる動作に6対4、人によっては7対3くらいにエネルギーを配分しているが見事に同時に行っている。食べることも怠らない。私は食べることとしゃべることのどちらかに集中してしまう。

この日の夜は、ホテルに宿泊していた観光客がそろってセイルズ・レストランのバーベキューに出かけたので、私はアネット夫妻と三人で夕食をしようとしたところ、アネットが、バーにvery beautiful American familyが来ているから紹介すると言う。それがホーリー＆アラン夫婦と高校を卒業したての娘と在学中の息子だった。この一家と、オーストラリアからダイビング＆シュノーケリングのビジネスをニウエで始めようとやって来たケヴン、農業関係のビジネスで来島しているオーストラリア人の計9人で大きな丸テーブルを囲んでこの日の夕食が始まった。

ホーリー＆アラン一家は全員が身長が高く、均整が取れていて顔立ちも大変に美しい。四人とも色よく日焼けしている。ご夫婦はとても魅力的だ。温か味があって、人付き合いがよく、いやみがない。彼らは以前、10年くらいニュージャージーに住んでいたというので、ニュージャージーをアメリカでの故郷と心得ている私は大変嬉しく、話がはずんだ。彼らはアメリカ西海岸を出発し、太平洋をボート（日本でいうヨット）で島から島へ、港から港

へと航海している。各地の港で同好の士と出会い、親しくなる。そこで交わされる会話の中に出てくる南太平洋の島々の評判を聞いて面白そうな島へ行ってみる。このように情報交換をしながら太平洋を floating しているという。「定住地などない、ただ floating しているだけよ」と笑いながら言っている。こういう生活をずっと変えたくないようだ。そして夫婦のどちらもが同程度にこの生活を好んでいるように見受けられた。ハッピーな人たちだ。明日、彼らのボート（Local Hero 号）を見に来ないかとアランに言われた。行ってみることにした。

1994 年 9 月 18 日（日）

リッグに送ってもらって 10 時から始まるアロフィのニウエ・エカレシア教会の日曜礼拝へ行った。イギリス人のバーバラ＆ケヴン夫妻も一緒だ。島の観光業者のリーフレットには教会への送迎サービスがあると書かれていたので、アネットに訊いてみた。彼女によると「もうやっていない。ニウエのことは何も信用してはだめよ、すぐに変わるんだから。」

日曜礼拝は午前と午後、二回行われる。午前の部はニウエ語と英語をおりまぜて、午後の部はニウエ語のみで行われる。牧師パエアはニュージーランドで資格を取ってきたニウエ人で、英語とニウエ語を自在に操る。また 400 人くらい入る会堂でマイクなしでしゃべる人だ。式次第は下記の通りである。

1．初めの挨拶（英語、ニウエ語）
2．祈祷（ニウエ語だが、初めの Let us pray と最後の Amen だけは英語）
3．賛美歌①（ニウエ語：全員が大声を張り上げ、元気な声で歌う。声帯に拡声器がついているのではないかと思われるほどだ。西洋音楽とは異なる、不可思議な、しかし心地よいハーモニーを作り出している。）
　賛美歌②（英語：歌詞をプロジェクターで写し、それを見て歌う。）
　どちらも最前席で若いニウエ人男性がギターで伴奏をしている。
4．聖書①（英語：コリント人への手紙）

聖書②（ニウエ語：繰り返し、唱和）

5．賛美歌（ニウエ語：大声で。元気な声で。）

6．祈祷（ニウエ語）

7．献金（ほとんどコインばかりだったが、前列のほうで紙幣を出そうとしている女性が一人いた。この間、ギター演奏。最後に牧師の謝辞。）

8．賛美歌（ニウエ語：元気に、大声で。）

9．祈祷（ニウエ語）

10．説教（英語、ニウエ語：聖書をテキストとして読み、解説。内容は

You are messengers/ambassadors of God.　God say through you.

The important thing is to know God and to let God be known.

最後に祈祷し、Amen。

11．賛美歌（ニウエ語：元気に、大声で。）

12．祈祷（ニウエ語）

13．賛美歌（ニウエ語）

ここで礼拝は突然終わる。バーバラが何回も言っていたが、The finish came abruptly だ。

今日は午前中、雨模様だったので会堂は埋まらず、全体で 90 人ほどの出席であった。そのうち、赤ん坊もふくめて子どもが 30 人近くいた。女の子が多い。正装している子も普段着の子もいる。正装し、黒革靴に白ソックスという姉妹のそばに、服装は正装だが裸足の妹がいたりする。島の人々は普段の生活では裸足だが、礼拝には正装し、靴を履いて行く。成人女性はつばのある帽子を被ってゆかねばならない。しかし、教会に着くと靴を脱いでバッグの中にしまったり、いつのまにか靴が足から離れていたりする。彼らにとり靴は本来、必要のないもので、裸足が最も心地よいのだ。

島では人が大勢集まる所には必ず子どもも犬も集まってくる。礼拝堂にも犬が入ってきて後方の入り口付近で座り込んだり、寝そべったりしていた。牧師の説教中に壇上に上がって歩き回り、下りていった犬もいた。

この島の犬は犬特有のふてぶてしさがない。人馴れした面もあるがいつもビクビクしている。人が大勢いる所に必ずのこのこと現れて、自分もその一

員であるかのような態度で人々の間を歩き回っているが、自分より体の小さな人間の子どもをすら（何もしないのに）恐れている。人間の機嫌次第で突如として追い払われたり、棒を持って追いかけられたりするからなのだろう。卑屈さが濃厚ににじみ出ている。首輪はつけていないが登録制をとっているので所有者ははっきりしている。しかし完全な放し飼いで、餌も犬自身が探さねばならない。それにしては人間に対する親愛の情が深いと見受けられた。昨日も干潮時にリーフの上を女が自分の犬らしいのと歩いていたが、その犬は彼女のそばに行ったり離れたりしながらリーフの波打ち際を嬉しそうにはしゃぎまわっていた。

午後、約束どおりLocal Hero号を見せてもらった。この島はリーフに囲まれているので船が直接、接岸できる港はない。三十数年前にそれを知らずに日本のマグロ漁船が島に近寄りすぎてハクプ村沖のリーフに座礁したことがある。日本人船員たちは難儀して断崖をよじ登り、村付近を歩いている時に村人に見つかった。身振り手振りで事情を説明し、村人たちから食料をもらって休憩した後、首都アロフィまで歩いて連行された。数日後、島を離れるまで、当時は数十人が泊まれる施設がなかったので彼らは刑務所で過ごした。島民たちは漁船が運んできた大量のマグロを手に入れて大喜びしたという。早速、即興の歌をつくって楽しむ伝統のあるこの島では、この話をもとにして島民の一人が小唄をつくり、それがおおいにはやったそうだ。またこの事件は植民地政府によってニュージーランド本国に報告され、本国は係官を直ちに派遣してきた。係官は船内を詳細に検分し、日本人たちの持ち物の

艀で人や荷を運ぶ

一つ一つにいたるまで報告している。最もニュージーランド人の関心を引いたのは長い航海の間に必要とされる常備薬で、多くの船員が持っていた胃薬を麻薬であると思い込み、彼らを逮捕しようとしたことがニュージーランド国立公文書館の資料に残っている。

以上のような事情なので、船は沖に停泊して艀や小さなボートで人や物を運ぶ。Local Hero 号も備え付けの小型ボートで波止場との間を行き来する。船内は全体が木目調で温かい雰囲気だ。キャビンは３室、トイレ、シャワールーム、キッチンがあり、作り付けの本棚のあるダイニング・ルームにはテレビが置いてある。長い航海では書物もテレビも必需品だろう。各キャビンには作り付けのベッドがあり、物が所狭しと置いてある。全然整頓されていない。ホーリーはキッチンでパンを焼いたりケーキを作ったりするが、娘も息子も指示されなくてもよく手伝っている。この子ども達は海上でも陸上でもその仕草を見ていると実によくしつけられているので感心した。しかし、家族四人だけで長期間を狭い船内で過ごすのは問題が多そうだ。特に若者たちが耐えられるとは思われない。昨日ホテルで会った時には楽しそうな４人だったが、今日、ヨットの中では彼らの間に緊張関係が感じられる。ニウエの後はニュージーランドに寄り、娘はそこで両親と離れて就職し、息子は高校生なので学校へ戻るつもりだと言う。当然の選択だろう。

1994 年 9 月 19 日（月）

この島に滞在するのが１ヶ月以内であればビザは必要ないが、今回は１年間の滞在予定（実際にはニュージーランドとの間を行き来するが）なのでビザが必要である。そのためには日本国政府発行の私に関する無犯罪証明書をニウエ政府に提出しなければならない。この証明書を入手するのに苦労した。警視庁のしかるべき部署へ行ったのだが、ニウエという国そのものの存在が知られていず、出せないという。そこで私は大学の先輩である外務省の高官を通して外務省から警視庁へプッシュしていただいた。意外だったのは外務省のアジア大洋州局でもこの島の存在を知らなかったことである。ニュージーランドの日本大使館に問い合わせて漸く把握したらしい。さらに、日本政府はニウエを独立国家として認めていないのでニウエ政府宛の公文書を発行することは不可能である、ニュージーランド政府宛ならよいが、と言ってきた。しかしニウエはニウエ政府宛の無犯罪証明書を要求している。日本の

外務省は自由連合国の現実に関して無知であったわけだ。私は再びアジア大洋州局に頼み込んだ。このような事情でニウエ政府宛の無犯罪証明書を手に入れたのは出発の数日前であった。

この証明書をもって本日、移民局へビザ取得の手続きに行こうとしたら、去年お世話になった統計局のフランクがちょうどこの部署も兼務しており、ホテルに迎えにきてくれた。統計・移民局へ着いたら、書類はすでに準備されていた。無犯罪証明書が取りにくかった話をすると、あれはただ形式を整えるために必要だった、という。いくら小さな島とはいえ、また知り合いの入国であるとはいえ、書類を完備しなければならないのは当然だ。しかし、フランクはしきりに謝っている。

ビザを取得した後、警察署へ行き、この島の運転免許証を取る。日本政府発行の国際運転免許証を提示し、5ニュージーランド・ドルを支払う。1年間有効。

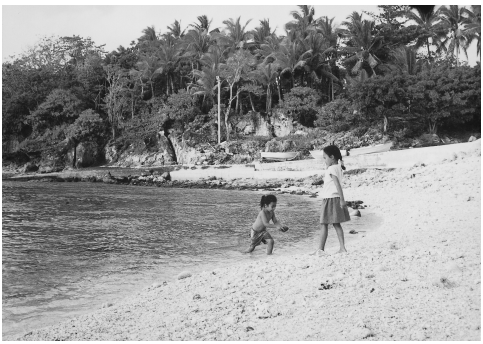
夕方、ハクプ村で行われる観光客対象のフィアフィア(宴会)に行くツアーにホテルの観光客たちと一緒に参加する。昨年同様、ハクプ村の重鎮ヤンギが村を案内し、解説をした。毎週1回、3年間も続いているツアーの解説をしているのだからもうすっかり立て板に水だ。ジョークも勝手に口から飛び出す。前回とほぼ同じコースで、同じ説明だった。ただひとつ違った点がある。村の教会の鐘つき堂に隣接して世界大戦に従軍して戦死または戦病死した村人たちのための碑が建っている。昨年はここで「日本軍と戦って云々」という解説が入り、一瞬ドキッとした。第二次大戦中、ニウエ人は連合国側についた宗主国ニュージーランドの兵士として出征したのである。今年はヤンギは私が日本人だと知っているためか言わなかった。やはりこの種のことを指摘されると日本人としてはあまり楽しいものではない。アバセリ村のフォトゥ老人が日本人のことを“Jap”と言い、絶対に“Japanese”と言わないことにも、Jap軍が来るのではないかという不安をもっていた1942～43年ころの話をすることにも、聞いていて私はやはり少し気が滅入ってしまう。

昨年お世話になった南太平洋大学ニウエ分校のマネージャーであるネリが私の住み込み先を探してくれることになっているのだが、なかなか動いてくれない。私も一緒に行くことになっているのに、約束はすでに何度も反故に

されている。ネリもそうだがこの島の給与生活者といえば政府関係機関に勤める人々のみと言ってもよい。彼らは実質的に月曜日から木曜日までしか仕事をしない。金曜日は飛行機の飛来日なので仕事は開店休業状態にして用事のある人もない人も飛行場へ行くし、土曜日はクリケットの試合がなければ男たちはブッシュで農耕をする。そして日曜日は教会へ行く。1週間は4日間しかないと考えて行動しなければならない。ネリが動いてくれるまでに半年くらいかかるかもしれない、と不安になってきた。早く住み込み先を決めて調査にとりかかりたい。

1994年10月1日（土）

アバセリ村に移り住んでから1週間以上経つ。集中的なフィールドワークをする予定のハクプ村から一村おいた村だが、ハクプでの住み込み先が部屋の準備ができるまで待ってほしいと言うので、しばらく海崖のすぐそばにあるこのモテルに住むことにした。断崖にぶつかる波の轟音が昼といわず夜といわず響いてくる。目の前に島唯一の浜辺が広がり、太陽はこの沖に沈んで行く。夕方、いつも私は村の若い女たちや子どもたちと共に浜辺で夕涼みをする。暮れかけた穏やかな海、波と戯れる幼い子どもたち、少し深い所で泳いだり舟遊びをしたりしている10歳前後の少年・少女たち、突端で釣りをしている男たち、岩陰でウクレレを弾きながら騒いでいる若者たち。それぞれ年齢集団ごとに夕暮れのひと時を過ごしている。こんなにのんびりと人々が自由に過ごしている時間と空間に私自身が身を置いていることが信じられない。これはきっと幻想に違いない。



島唯一の浜辺で遊ぶ子どもたち

夜の8時ころまでは村のあちこちから人の（とくに若者と子どもの）大声が聞こえてくるが、8時を過ぎるとピタッと止む。まるで申し合わせたように眠りにつく。朝が早いのだ。

雄鶏だけが時刻に無関係に鳴き声を高らかに放っている。こちらの一羽がコケコッコーと放てばどこか遠くからそれに返してくる。またこちらが鳴く。するとまたむこうが返してくる。二羽でしばらく応酬しているとどこからか第三の雄鶏が仲間入りしてくる。そして先の二羽のうち一羽が譲って消えてゆく。これを数十分も続けているのだ。夕方や昼間ならそれもよい。昨晩は裏の雄鶏が始めて随分離れたところの雄鶏としばらくやりあっていた。時計を見ると真夜中の12時少し過ぎ。彼らに体内時計はないのだろうか。

鶏も人間が餌をくれるわけではないので、昼間はかなり広範囲を遠征して生計をたてている。夜は木の上で眠る。朝早くバタバタという騒音がしてその直後に鳴き声が聞こえるが、その時が彼らの起床時間らしい。夜鳴くのは何のためなのだろう。何のコミュニケーションをしているのだろう。テリトリーの主張か、示威行為か。それにしても夜までコミュニケーションするのは何のためか。

雌鶏の様子を見ていると攻撃性と包容性を併せ持っているのを観察できる。彼女たちもヒヨコを十匹内外連れて生計のために遠征している。ヒヨコといってもほんの小さいものから大分大きくなり若鶏に近づいたものまでがゾロゾロと母鶏についていく。母鶏は自分の気の向くままに歩いている。歩く速度も方向も完全にマイペースだ。ヒヨコたちは母鶏の行く手にまるで糸で引っ張られるかのようについて行く。いつも母鶏の尻尾にくっついているもの、一歩遅れるもの、自分で何かをつついている間に母やきょうだいたちが先に行ってしまったのであわてているもの。そのあわて方や、あせって転がりそうになりながら全速力で走る様など、見ていて吹き出してしまう。母鶏はそういうヒヨコたちを目の隅に入れながらも自分のペースで餌をついばむのに余念がない。ところが一行のそばに何ものかが来ようものなら母鶏は気が狂ったように攻撃を加える。何もしない相手にも積極的に攻撃してくる。犬は先制攻撃を受けると一瞬、反撃の体勢をとるが、母鶏が大騒ぎしながら（コッコッコッと大声で鳴く）猛襲してくるのでたいてい退散してしまう。どこかで雌鶏の大喧騒が起こったらたいていはこういう出会いだと思えばよい。

犬、猫、鶏などこの島の小動物は同じ空間を分かち合って生息している。どれも放し飼いで自給自足して生きているが、生計を立てている食料資源に重なりがあるので、同じものを前にした時には力関係によるつつきの順序が生ずる。ココナツ果肉はみなの大好物だが、犬より鶏の方が優位だった。猫はみなが去った後、のぞいていた。

私は身体中が赤い斑点だらけになってしまった。手足、胴体、顔のあちこちにツベルクリンを受けて強い陽性反応が出たかのようだ。猛烈に痒い。痒いから掻く。掻くからもっと痒くなる。蚊、アリ、ハエ、黒い点のような微小な虫、等々刺す輩が無数にいるので、蚊取り線香を点け、忌避剤をこまめにつけても防ぎきれない。敵もさるもので、耳の後ろや肘の後背部など人間の関心の中心から遠い部分を襲ってくる。長袖を着ていても手首に集中してくる。日本とニュージーランドから持ってきた痒み止めは一向に効き目が感じられない。

私は、当面自分に直接迷惑をかけているわけではないがいずれ迷惑をかけられる可能性のあるアリ、蚊その他の虫を潰すことにしているが、ここの人たちを見ているとうるさく攻撃してくる虫でも追い払って、当座、自身から離すだけだ。むやみに殺したりはしない。

1994 年 10 月 2 日（日）

今日はヘレニたちとアバセリ村の教会へ行った。後ろの方の座席で人々の様子を見る。4 歳くらいの男の子が右隣に座っている女が抱いている赤ん坊が可愛くて仕方がないらしい。頬に口をつけたり何か言ったりしてかまっていたが、ついに抱かせてもらって大喜びだ。赤ん坊もその男の子を見てニコニコ笑っている。しばらく抱いていたが、ついに母親に取り上げられた。男の子はまたその赤ん坊をかまい始めた。母親は「静かに」と男の子に厳しく注意する。男の子が少しでも動くと膝をたたいて叱りつけている。そのうちこの男の子はそのお母さんに寄りかかっておとなしくなった。この様子を見ているかぎりではこの母親と男の子はどう見たって親子に見える。だが、この男の子は左隣にすわっている 3 才くらいの男の子とおそろいの服を着、髪型も同じで、容貌も似ている。兄弟に間違いない。そしてこの二人を連れて入ってきた男性が父親で、その男性と一緒に入って来た左隣の女性が夫婦で

あることも確かだ。これはいったい何なのか。4歳児の右側の女性はこの子の母親ではないのだ。しかし、母親のように接している。子どもも母親に叱られた時のようにしおらしくするし、母親に対するように甘えているわけだ。

この島の母親たちは子どもを頻繁に叱る。意味もなく叱っている時もある。少しでも落ち着きなく動くと脚をたたいたり、じっとしているようにと叱りつける。子どもは動きが多いものと考える私の先入観がそのように思わせているのだろうか。広場などで子どもたちだけでいる時には元気いっぱい走り、飛び回っているが、大人がいる場では多動は許されない。ただし、大人たちは子どもの同一行動に対して必ず叱るわけではない。大人のその時の気分次第で叱ったり叱らなかったりする。一貫性に欠けているという印象を受ける。

犬に対しても類似の行動をとる。犬はいくつも名前がつけられ、人々はみな思い思いの名で呼んでいる。彼らに名前はあっても首輪も鎖もなく、放し飼いだが、飼い主に大変忠実だ。飼い主（あるいはその家に住んでいる人）が出かけるとついて来てその前後を嬉々として歩いている。ところが全く邪魔も悪行もしていないのに飼い主は突然、「あっちへ行け！」とか「家に帰ってろ！」とどなったり、石を投げつけたり棒を持って追い払ったりする。犬は身を翻して逃げるが、結局はついて来る。飼い主は次の瞬間、他のことに気が向いていて、もう追い払わないからだ。飼い主はただ犬との地位関係をはっきりさせるため、つまり犬のボスであることを示すためだけに犬を叱りつけているようだ。子どもに対してもそうなのかもしれない。子どもは母親の配下にあることを示すために必要以上に叱るのかもしれない。

ポリネシアは伝統的に兄弟姉妹間の絆が強い社会である。現実に彼らの生活を見ていると、兄弟姉妹の仲がきわめてよい。喧嘩をする年頃であってもしない。上の子は下の子をとても可愛がり大事にする。モテルのオーナーであるシモナ家の19歳の長男ラトアは末っ子のアオガに親のような態度で接している。下の子は上の子に一目置き、逆らわない。別の家族のヘレニ（22歳）も妹ネリッサ（10歳）の母親のようだ。ネリッサは姉が行くところについて行き、夜遅くなっても眠い目をこすりながら姉の用事が終わるまでじっと待っている。姉は妹が年齢集団の仲間と遊んだり泳いだりしている時など、母親のように注意深く見守っている。母親に代わって年長の兄姉が年

少の弟妹の世話をする慣行が成長しても続くのだ。

日常生活上の仕事は性と年齢によりほぼ分業体制ができている。皿洗いや食器の片付けは girls’ work であり、男も大人の女もしない。娘が数人いる家では、女の子たちのなかでもハイティーンになると食事作りや、壊れやすい物を扱ったり特別にきれいにする部分の掃除を任されるが、十代前半の中学生くらいだとそれほど気を使わない箒で掃くなどの仕事を、小学生は姉たちのお手伝いをする。4、5 歳くらいまでは仕事は課されず、みなが家事をしている時に遊びまわっていても寝転がっていてもよい。しかし、母親にくっつくと大声で厳しく叱られる。

毎日、一度は島の外周を巡り、13 カ村の様子を見ている。時速 50 キロでゆっくり周囲を観察しながら運転して 1 時間くらいだ。この小さな島でも植生は複雑で、潅木林あり、雑木林あり、熱帯雨林ありだ。熱帯雨林の中を歩いていると、依然としてそこには人間の手の及ばない自然の造営物が豊かに息づいていて、薄暗い森にたった一人でいても恐ろしさよりむしろ森の包み込むような温かさを感じる。

1994 年 10 月 14 日（金）

午後 2 時ごろ轟音がしたので上空を見ると飛行機がちょうど空港の滑走路を離陸して海に抜ける方向に飛んで行くところが見えた。あの高さだとこの島の一軒一軒がよく見えるだろう。あれに乗ってこの島を出るのはまだ 3 ヵ月も先だ。飛行機に乗っている人たちが一瞬、羨ましく思う。

夕方、ハクプ村へ移動。ネリ一家がバンで迎えに来てくれた。これから私はネリの両親のヴァイレレ家の居候になるのだ。ハクプ村は首都アロフィとは反対の島の東海岸にある村である。濃いオレンジ色の夕日を背に受けて黒々と立つココヤシの木々を見ながら凸凹の多い道を進む。村境には村名を記した標識が立っている。アバセリ村の隣りのヴァイエア村からハクプ村に入ったあたりの風景が私は好きだ。絵のような緑のトンネルの向こうに静かな、落ち着いた、平和なコミュニティが広がっていることを想像させる入り口だ。村を貫通する道が曲線を描きながら白く光っている。

ネリの母親メレ（50代）は去年は手術後だったので少し病弱に見えたが、今年はすっかり元気そうだ。夫のクラ（50代）ともども去年より一回り太目になった。ネリ夫婦と娘のシファ（4歳）は通りを隔てた向い側の家に住んでいる。ネリの妹キリ（20代）は生まれたばかりの娘シアヒを連れて実家で暮している。シアヒの父親は誰だか分からない。

この日、ニュージーランドに住んでいるメレの妹フィシ（50代）が島に里帰りしていた。彼女のひとり息子トルがニュージーランドでシェフの資格を取得し、アロフィ唯一のモールの一室に軽食の店を開店するという。今日が開店当日なのだ。息子夫婦は忙しいだろうから孫たちの面倒を見ようと島にやってきたのだが、孫の世話は息子の妻方の親族がすでに手分けして行っている。フィシは多忙な息子夫婦の家に泊まらずに姉メレの家に2週間宿泊することになった。おかげで私の相手を充分にしてくれた。

トルの店はハンバーガーやフィッシュ・アンド・チップスの他、揚げ物や中華風の食べ物を作って売る。最近はニウエでも昼食を食べる人が増えてきたし、また外食ブームでもあるので、トルの店も滑り出しは好調だ。

フィシはトルの店を少し手伝ってから姉の家に戻ってくると、疲れたと言って居間のソファベッドの上にどっかりと腰掛け、大声でしゃべり続けている。姉のメレが食事を作り、クラが仕事から帰ってきて片隅の椅子に腰掛けるが、フィシは大きなソファベッドを占領したままだ。自分の養子と養女のこと、その子どもたちのこと、ニュージーランドの親戚の話、教会の話、等々話が尽きない。夜になって、ソファベッドの上に寝転がりそのまま（昼間のワンピースを着たまま）眠ってしまった。

1994年10月15日（土）

この家にはもう一人ファネと呼ばれる10歳の女の子が住んでいる。彼女はクラの弟の娘でクラの姪にあたる。メレとクラは三人の実子が成長した後、「小さい子がほしい」という子どもたちの要望を聞き入れて生まれたばかりのファネをもらってきたという。彼女の実親の家は近隣なので、授乳期には実母のところへ授乳のたびに連れていった。彼女の両親は子どもが12人もいて食べさせるのに苦労している。ファネはメレの家で充分に食べているから幸せ者だとメレは信じている。正式な養子として登録していないが、完全

に家族の一員として扱っている。私たちはこういう存在を“里子”と言うが、この社会では伝統的に養子と里子の区別はしていなかった。現在はヨーロッパの法制度にならい、法的な養子縁組を「登録養取」（registered adoption）と言い、登録はしていないが実質的に親子として生活している場合を「慣習的養取」（customary adoption）と言っている。ファネは後者である。

ファネはよく働く。食後の皿洗いは彼女の仕事だ。家中の人の洗濯をし、乾し、取り込んでたたむ。みなは彼女を犬を呼ぶのと同じ調子で呼び、お茶を淹れろ、パンを焼いてもってこい、あれをやれこれをやれと命じられているが、嫌な顔ひとつせずに良く働き、いつもにこにこしている。今朝はメレが居間で寝たあとの寝具の片づけをやっていた。そしてブッシュに行く前、大人の女たちが居間でねそべっておしゃべりしている時、庭で草むしりをしていた。食事はしたのだろうか。ファネはクラとメレがブッシュに行く時は一緒に行き、働く。また時には遠いブッシュに自転車で何かの食料を取りに行かされることもある。10歳の女の子は一通り大人並みの仕事ができるものだ。歩いて1、2分の実親の家には時々行き、妹たちと遊ぶこともあるが、すぐにクラの家に帰ってくる。ここが彼女の家なのだ。四六時中あれこれの用事を言いつけられるが、誰もいないと昼寝もするし、みな眠れば一緒に眠る。それに何といっても、ここではお腹いっぱい食べられるし、教会へ行く時のきれいな服も買ってもらえる。

この島では土曜日は“ブッシュ・デイ”だ。給料生活者もブッシュへ行き、農作業をする。ヴァイレレ家でもメレ、クラ、長男のネリ、それにファネが遅めの9時ころ、かなり使い込んだ小型トラックに乗ってブッシュへ出かけた。赤ん坊のいる若い女はブッシュワークは免れているようだ。長女のキリは部屋の掃除をしている。ネリの妻タナは2人の子どもとキリの娘シアヒを連れてアロフィに出かけた。メレの妹フィシは私相手におしゃべりした後、眠いと言ってソファベッドで眠ってしまった。昨晩遅くまでメレとおしゃべりして、今朝も4時ころからクラやメレとしゃべっていたから睡眠は昼寝でとるのだ。ブッシュに行った4人は午後1時ころ帰ってきて、居間でベッドや長椅子に横たわりお昼寝に入った。

ここでは“掃除”とは外に掃き出すことである。物を落としてもこぼして

も拾わずそのままにしておくから、家の外と内の違いは見た目にあまり違わない。何でもその辺にポンと投げておく。テーブルや棚の上と下を区別しているようには見えない。哺乳瓶のキャップも床の上にころがっている。食器も衣類も枕もやりかけのクラフトも。捨ててあるように見えるが床に置いてあるのだ。捨ててあるものと置いてあるものの区別がない。私が贈ったばかりの日本からのおみやげも床にころがっている。掃除をする人が捨てるものととっておくものを区別しているようだ。

テーブルの上にはテーブル・クロスをかけてあり、そこに蝿がたくさんたかってうごめいている。食べ物のかすや残片がたくさんのっているからだ。あまりかすが増えた時にはクロスをはずして外でパタパタと払っている。このクロスは直接パンを置くなどお皿代わりにもなり、残った食べ物の覆いにもなる。

ポリネシアでは、男が food provider であると言う。しかしこの島では食事の材料を供給するのは男とポリネシアでも珍しくブッシュワークをする女である。一方、家族員に日常的に食事を調理して供するのは主婦の仕事であるが、それは義務というよりも権利であることを実感する。彼らの伝統的な料理である石蒸し料理(ウム)を作った時にそれがはっきりする。出来上がったウムを地炉から出してテーブルに並べ、バナナの葉で包んだウムを一つ一つおもむろに、おごそかに開き、皿に取り分けるか「さあどうぞ」と言ってみなの取り方を見守るのは主婦の役割だ。メレは絶対にそれを娘にも嫁にもさせない。もちろんほとんどの台所仕事を引き受けているファネにもやらせない。男たちも待っているだけだ。

つまり食料の分配をするのは主婦である。日本でかつて儀礼として行っていた「ヘラ渡し」と言う姑から嫁への主婦権の移譲を思い出す。近代社会では食事を作って供するのは主婦の義務であると考える人が多い。だがこれを家族員各自の分量を意のままに手加減できる食料の分配行為であると考えれば、食料が余るほどある社会を除けば権利ととらえなおす事ができる。

食べ物にありつく順序、すなわちつつきの順序はほぼ決まっている。日常的な食事では①父と母、②若い既婚の男女、③子どもたちの順だ。赤ん坊は母親か祖母と一緒にありついている。大皿料理の場合、途中でなくなること

があるが知ったことではない。肉などが①でなくなることが多いが、②や③に残しておくことはしない。

1994年10月16日（日）

4寝室ある家なのでクラとメレ夫婦の寝室は奥にあるのだが、彼らはいつも居間のソファ（クラ）と敷きっぱなしの布団（メレ）に寝ている。夜はたいがい居間のテレビをつけっぱなしにして寝てしまう。大分経ってからどちらかがテレビに気づいてファネに命令し、消させる。一度、私が消したが、少し時間が早すぎたのかクラが目覚めて「消すな」と怒った。翌朝、そのままその場で目覚め、身体を起こしてお祈りをする。

毎朝5時15分に教会の鐘が鳴る。これは朝のお祈りの鐘で、これを合図に村の人々がみな目覚めてお祈りをすることになっている。ヴァイレレ家ではクラが5分くらいニウエ語で祈る。今日はそれからクラ、メレ、逗留中のフィシの三人のおしゃべりが始まった。お祈りの後、眠ることもあるが、今日はフィシがいるせいかおしゃべりが続く。

日曜日には礼拝は朝7時30分、午前10時、午後4時と3回行われる。早朝の礼拝はほとんど老人ばかりだ。10時の集まりは50分間でやや短い。4時の礼拝が最も長く、1時間半の礼拝である。鐘は村の執事が鳴らす。10時の礼拝の前なら、9時半に1回目の鐘（「礼拝に行く準備を始めなさい」の意味）、9時50分に2回目の鐘（「家を出なさい」の意味）が鳴る。村人はこの鐘の合図に合わせて教会に集まる。

今日、我々は10時と午後の礼拝に行った。午後の礼拝が最も活気があり、参集者も多い。多くの村人は両方に出席するが、若者は土曜日の夜は遅くまでパーティーをしたりダンスに行ったりするので、日曜日の朝は起きるのが遅く、午前中の礼拝にほとんど顔を出さない。

日曜の教会行きは晴れ着やよそ行き、つまり正装をする唯一の機会だ。老いも若きも男も女も子どもも赤ん坊もみな目いっぱい着飾ってくる。午前と午後の礼拝に服を替えてくる人も多い。メレもそうだ。女はワンピースかアンサンブルにつばのある帽子を被ることになっている。家の中の整頓はともかくとして、飛び切り美しく着飾ってくる。

正装をして教会へ行く村人たち

6、7歳から8、9歳の男の子や女の子が2、3歳の幼児を連れてくることが多い。幼い子どものことは年長の兄姉の責任なのだ。礼拝中も幼い子どもたちは通路を立ち歩き、会堂から出たり入ったりする。そこは歩き始めの赤ん坊の歩行訓練の場ともなる。通路の両側から何組もの腕が伸びてきてよちよち歩きの子どもを抱こうとする。幼児を追って小さな少年や少女たちがぞろぞろと歩き、会堂を出たり入ったりしている。

2、3歳の子どもは壇上で説教をしている牧師のそばに行ったり、献金箱にさわったり移動させたり、中のお金をいじったりすることもある。すぐには誰も何も言わないが、しばらくすると責任のある年長の子（兄姉、その子を連れてきた子、その子をそばに置いた子など)が大人に手厳しく叱られる。ある母親の隣に座っていた6歳くらいの少女は、3、4歳の弟が動き回ってついに壇上に上がっていった時、母にひどく叱られた。母親は彼女の頭を平手でたたき、次にげんこつをふるう格好をした。小さな少女は弟が消えてしまった壇上の奥の出入り口に入って探したが見当たらなかったらしく、ひとりで戻ってきた。

幼い子を少年少女たちみんなが取り合う。弟や妹だけではない。イトコまたは第2イトコという場合も、親族関係のない場合もある。そして幼い子が泣いたりむずがったりすると、その子に責任のある年長の子が大人に頭や膝をぴしっとたたかれ、きびしく叱られる。それでも子どもたちは幼児を取り合っている。叱る大人は必ずしも親や祖父母とは限らないが、子どもたちは神妙に言うことを聞く。誰が誰の子やら判らない。祖母も祖母の姉妹もイト

コも、母も母の姉妹もイトコも子どもに対する態度は私には同じに見える。

日常の食事は簡素だが日曜日は教会から帰ると家族そろってウム料理をお腹いっぱい食べる日だ。キリスト教の伝来以来、日曜日は安息日として仕事をすることが禁じられてきた。現在でも「誰それが日曜日なのに何をしていた」と噂になるくらいだ。火をおこして料理することも禁止されたので、土曜日の午後に日曜日のウム料理を準備しておく習慣ができた。最近はオーブンが導入されたので日曜の朝、オーブンに入れて焼くだけの簡易方式もあるが、通常は、土曜日にタロイモ、鶏肉、その他各種の食材や食材の組み合わせをバナナの葉で包むという手間と時間のかかる作業を済ませておき、日曜日の朝、それらを石焼き炉に入れておくと、礼拝が終わって帰宅するころにはできたての温かいウム料理が食べられるようになっている。

この日も教会から帰ると、メレの采配で全員がうきうきと心を弾ませながら手伝い、炉からウム包みを取り出して食事が始まった。空腹の極限を通り越した人々にとり、たくさんのウム包みを開く時以上に幸せな瞬間があろうか。みな、幸福感にあふれた表情をしている。食べ進んでいると、近隣の子どもが籠に包みを入れて届けに来た。ウムの一部は村人や親戚にあげたりもらったり、お返しにしたりする。村の中を10歳前後の少年・少女たちがココヤシの葉で編んだ籠をもって走り回っている。彼らも忙しそうだ。

何かが終わった後、彼らはよく昼寝をする。グーグーいびきをかいて眠っ

タロイモの皮をむいてバナナの葉で包む

ている。メレの布団は居間で万年床。枕も置きっぱなしだ。その布団の上を裸足の人も靴を履いた人も遠慮なく歩く。メレ自身も靴を履いたまま布団の上を歩いている。

午後、ネリの妻タナの母親が入院しているアロフィにある島唯一の病院へフィシ、メレ、キリ、シアヒ、私の5人でお見舞いに行った。病院に着いたら、まず外廊下にいた3人の見舞い客、その後、1人の老人入院患者のところでそれぞれ20分くらいずつ立ち止まって話し込む。ようやくタナの母のもとに着いた。彼女は大きな病室にベッドが2つ置いてある寒々とした部屋に寝ていた。この政府経営の病院はWHOから派遣されている医師と2名の看護婦で医療を行っているので入院には家族の付き添いを必要とする。医師は一般的な処置をするだけであり、少しでも重い病気を疑えば人々はニュージーランドの病院へ行く。

1994年10月17日（月）

ヴァイレレ家は今夕、村で行われる観光客のためのフィアフィアの当番にあたっているので、朝早くから大忙しだ。鶏肉は20羽くらい冷蔵庫に用意した。クラは最近、養鶏をビジネスとして始め、やや軌道に乗りつつある。地元の人たちに1羽9ドルで売っているという。飼料はニュージーランドから輸入したものだ。島には放し飼いの鶏がたくさんいるが、肉がかたいので現在はあまり食べない。人々はむしろブロイラーの鶏肉を好み、クラから買うのは儀礼など特別の時である。

バナナ、バナナの葉、ココナツ、ココヤシの葉、食用シダ、その他今日使うものは昨日のうちにクラとメレとファネがブッシュで採ってきた。不足分は今朝、ファネに採りに遣った。クラは大量に使うココヤシの実を削っている。メレは別棟の台所にどっかりと座り込み、ウムの食材をファネに命じて手渡させる。座り込んだら最後、動かないから、そばにいる人をこき使うことになる。あれを取れ、これを取れと。タロイモにも大小あり、メレは思ったものをファネが手渡さないと舌打ちするような感じで怒っている。出勤前のネリも手伝っている。

別台所の炉には赤々と燃えた石がたくさん入っていて、その上に置かれた薪がこれも赤々と燃えている。まだまだ、もう少し石が熱するまで。ファネ

は赤くなった石を一つ取り出して昨日処理した鶏肉のレバーの小さなかけらを二つ、その上に置いて焼き、おいしそうに食べた。少し火にあぶって柔らかくしたバナナの葉やアルミホイルで包んだウムがたくさん運び込まれる。ようやく石が充分に熱したらしい。メレはココヤシ葉の芯を折り曲げて作った火ばさみで燃えている薪を一つ一つ取り出し、外に捨てている。ポーンと投げ捨てる様が実に豪快だ。次に石をひとつずつ炉の縁に取り出して置く。中には石ではなく鉄片まで入っている。みな真っ赤だ。底に焼けた石を少し残して包み物を入れる。その上に真っ赤な石を乗せ、その上にまた包み物。何回か重ねた後、一番上に石を乗せ、その上にバナナの葉を幾重にも乗せ、さら新聞紙を重ねて、その上に空になった飼料袋を乗せ、最後に薪を重石として置く。

その後、各自、適当に朝食を食べた。はす向かいのジャックの作るココナツ・ブレッドがきわめて評判がよい。私も大好きだ。このパンを買ってくるのが私の役割のようになってしまった。ファネがこのパンを２枚切り、マーガリンを塗って重ねて、半分に切ったものを紙に包んで持って行く。彼女のお弁当だ。なにも言わずに出かけて行く。白いブラウスに水色のジャンパースカートという小学校の制服を着て。

その後､私はヤンギにインタビューする約束をしていたので彼の家に行く。彼はこの村の教会の執事であり、村代表の国会議員を長年務めている。長期政権を握っていた前首相サー・ロバート・レックスが急死した後、現首相フランク・ルイが選ばれるまでの半年間、首相を務めたこともある。この村で二階建ての家は彼の家だけだ。木陰の風通しのよいバルコニーで話を聞く。妻のトーラは大変明るく、明敏な人柄だ。“At this moment, my interest is fading.”と言ってどこかへ行ってしまった。

昼ころ戻ったら、ヴァイレレ家は朝９時ころから来ている手伝いの女たちで活気に満ちていた。トーラもここに来ていた。クラの姿は見えない。ブッシュか養鶏ファームに行ったのだろう。女たちは別台所の前にどっかりと座り込んで作業をしている。手も動くが口もよく動く。よくしゃべり、よく笑い、またよく食べる。お互いにそれを取れ、あれを取れと言い、取らせている。全員が全く移動せず、座り込んだままだ。もちろん裸足であぐら座り。

彼女たちはどこにだって座り込んでしまい、動かない。

ヴァイレレ家のはす向いの家に住む、島の婦人会副会長イラがようやく身体を運んでいるという風情でゆっさゆっさとやって来た。手伝いではなく様子を見にやって来たのだ。彼女は私が彼女達のために作ることになっている日本食に関心があった。私の料理ができるまで待つ、と言って外のコンクリートの上にどっかと座る。もちろん裸足だ。料理が出来上がった。取り分けるお皿はいらない、誰かが使ったものでよい、という。スプーンもいらない。バナナの葉をちぎって、これですくえばよい、という。他の女たちも同じだ。

5時ころ、できあがったウム料理を車に乗せてトアセア学校跡（人口減少により廃校になった。現在は建物だけが残っている）へ運ぶ。ヘニたちが飾り付けをしておいてくれた。葉を編んで作った大皿にウム料理をのせて次々に出す。今回は齢50歳くらいの大きなヤシガニが3匹も出ている。ハトもある。普段はなかなか出さない葉物野菜である苦味のある野生のホウレンソウとやわらかいシダも。

今日の観光客はニュージーランドからのパランギばかりであった。その中に以前、リク村で調査をしたことのある、ニュージーランドの人類学者トム・ライアンがいた。私が日本から出した手紙に返事をくれなかった人だ。手紙のことは憶えていて、職場でゴタゴタがあって手紙がどこかへいってしまい住所が分からなくなった、と言う。パランギがよく使う言い訳だ。ただ、オークランド大学人類学部で彼を巡る人事関係の紛糾があったのは事実で、現在彼はワイカト大学に籍を置いているというが、不満そうであった。トムは人柄は良さそうに見えるが、人類学者としての行動には疑問を感じる。地元の人々の目の前でいつでもノートに何か書き付けている。このフィアフィアの時にまでメモをとっているのだ。このくらいのことはそらで憶えておいて、ホテルに帰ってから大急ぎでフィールドノートに書けばよいのに。フィールドの人々に対する配慮が足りないフィールドワーカーだ。

今回のフィアフィアもいつもどおりに終わり、観光客はマイクロバスでアロフィに帰っていった。残った食べ物に女たちは群がり、それぞれ予め用意してきた入れ物に入れて家にもち帰る。それにしても後片付けに時間がかかる。さっさとしない。座り込んだり、ただ立っていたり、時間の経つのを待っている風情の人もいる。てきぱきすればすぐ済む仕事もおしゃべりしたり、

うろうろしたりしながらするから、いつ終わるのやらわからない。

1994年10月18日（火）

午前中からトアセア廃校で村の婦人会があるという。この島の女たちは（よほど好まない人を除いて）暇さえあれば帽子、（壁飾りにも鍋敷きにもなる）大小のマット、バッグ、籠、コースターなどの手工芸品を乾燥させたパンダヌスの葉を裂いて編んでいる。少量は輸出品になるが大半は観光客相手のおみやげとして売られるものだ。婦人会ではこの編み物をみなで一緒に行いながら、無尽をしたり、礼拝用の晴れ着作りの依頼や仮縫いなどをしたりする。もちろん、おしゃべりしながら時を過ごすので、村や島全体の噂話やニュースがおおいに飛び交い、彼らの重要な情報交換の場ともなる。面白そうだから、メレについて行った。

9時開始と聞いていたが、10時ころまでココナツ粥を食べたりして仕事はなかなか始まらない。人の集まり方もばらばらで、10時半、11時になってやって来る人もいる。最終的に若干名の30～40代を含め50～60代を中心に10人くらいが集まった。会はいつの間にか始まっていた。

無尽は9人でやっている。2週間ごとに1人50ドルずつ出し、当番の人の懐に入る。今日は隣家のレナが当番で、彼女は電化製品を買う予定だ。

彼らの労働の姿勢は基本的に床にあぐら座り、脚を投げ出す、脚を少し曲げて投げ出す、のどれかである。椅子やソファがあれば初めは腰掛けるが、いつの間にか、その上であぐら座りをしたり、下りてソファに寄りかかって脚を投げ出したりあぐらをかいていたりする。この点は日本人と同様、まだ身体が椅子に腰掛ける姿勢に適応していないのだ。トアセア廃校の元教室だったこの部屋で、彼らはコンクリートの床の上にそれぞれ場所を占め、壁に寄りかかってほとんどの女は脚を投げ出している。一度どっかと座ると動かない。人に手渡すものは放り投げ合っている。重量のあるものは飛んでゆくが、紙幣などは放っても目的地に到達するのは難しい。彼女たちのうち半数くらいは子どもや孫を連れてきているから、周囲では幼児が動き回っている。この子たちの誰かがさっと走って行って途中で落ちたものを拾い上げ、先方に届ける。幼い子どもでも誰が誰に向って投げたか、正確に把握しているのには感心した。

洗濯をしようと外の洗い場に行った。流し台と並んで大型の電機洗濯機が2台置いてある。1台は壊れているらしく最近使われた形跡がない。私は流し台で手洗いをしようと思ったが、そこには洗濯前なのか洗濯後なのか分からない服がたくさん積み重ねて置いてある。みな乾燥してカラカラだ。洗濯機の中にも辺りの地面の上にも服が散乱している。差し当たって流し台の服をどこかへ移動させねばと思い、つかんだら、5センチくらいのゴキブリが3匹走り出て来た。そばにいたメレがそれをつかんでポイと捨て、「さ、ここで洗ったらいい」といった。物干しロープが木々の間を縦横に張り巡らされている。家族全員の1ヶ月分の洗濯物を一度に洗っても干せるくらいだ。洗濯バサミは落ちたらそのままにしてあるから、あちこちに落ちている。使う時に拾って使うのだ。

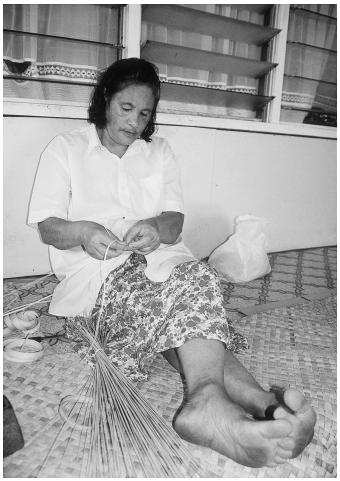
ゴミ箱というものはない。その辺りに何でも捨てるから必要ないのだ。何日かに一度、ココヤシの葉で作った箒で掃く。大きなゴミは家の外に掃き出すが小さなゴミは部屋の中の目立つ場所から周囲に掃き散らしている。掃除とはものを移動させるだけのようだ。シアヒの汚れた紙オムツが部屋の入り口脇にうず高く積まれている。これも数日後、ゴミになるまで部屋の中に置かれているだろう。

「捨てる」と「置く」の行動をする時に意識的に「捨てる」のか「置く」のかを明確にして行動する文化と区別しない文化がある。後者は、行動するにあたって区別せずにその辺りに置いておく。後に必要になればそれを使うがこれは「拾う」のではない。置いてあるものを使うのである。このような文化ではものがいかにゴミのように見えてもそれはゴミではない。いつ使うか分からないからそこに置いてあるのであり、ゴミを拾って使うわけではないのだ。そしてそれがいつの間にか風に飛ばされてどこかに行ってしまったり、何かのきっかけで捨て去られればそれは「捨てて」あったことになる。「捨てて」あるものと「置いて」あるものの区別は結果として出てくるだけだ。トイレの床に置いてある古い雑誌、シャワールームの前の汚れた床に落ちているクラのシャツ、自家用車の床に落ちている鍵や子ども服やスプーンや何かの蓋、台所の床に転がっている誰かの服、台所の水道の辺りにある誰かの靴下片方、すべてそうだ。まだ結果が表れないだけであって「だらしなくゴミを捨てないでいる」のとは違うのだ。

キリが掃除をしようとして箒を探している。私も一緒に探したが見つからない。すると彼女は「あっちから借りてくる」といって向いのネリ＆タナ夫婦の家に行き、タナの作った大きな重い箒を持ってきた。誰もいなかったから断りなしに、だ。その箒はその後、ずっとこちらの家で使っている。タナは母親の具合が悪く、アバセリの実家に帰ったままで、夫のネリがアバセリに時々寄るという生活をしている。タナがハクプに帰ってきて掃除をしようと思った時にこちらに取りにくるだろう。彼女が掃除をしない限り、この箒はこちらで使うことになるだろう。こちらの箒もそういう風にしてどこかへ行ってしまったに違いない。

キリがガス・オーブンに点火するためのマッチを探している。どこにもない。「さっき使ったばかりなのに」と言っているが、使った後、その辺にポイと置くから次に使う時に必ず探さねばならない。マッチがなかなか見つからないので、キリはまた「あっちからもってくる」と言ってネリの家に行き、無断でもってきた。そのマッチもそのままこちらで使い続け、1本もなくなった。

こちらのヴァイレレ家と長男ネリの家とは住む家屋は向かい合っているが別棟だ。しかし、ネリが結婚し世帯をもってからそれほど年月が経っていないので、ネリ一家はまだ親の世帯に付属しているようだ。食事はたいてい一



パンダヌスの葉でマットを編む

緒で、メレが買い置いた食料品をネリもタナも冷蔵庫や戸棚を自由に開けて使っている。ブッシュやファームでの仕事は共同労働、すなわち生産と消費に関しては一つの単位といってよい。また教会活動やフィアフィアをはじめとする村内の行事ではあわせて一つの世帯と見なされている。従って日常用品を断りもなく使うのはある程度、当然のこととともいえる。

キリが何かを探しているらしく、居間の戸棚の中や上を一所懸命に見ている。その後、台所のオーブンの横を見、ついで新しいオーブンや大鍋、缶詰類、使い終わった食料品の紙袋、塩など台所関係のものが雑多に入っている脇の小部屋をのぞいている。バルコニーの昼寝用ベッドの上も見ている。新しいナイフやフォークが入っている居間のキャビネットの上も探している。「何を探しているの？」と聞くと「わたしの片方の靴、知らない？」

メレが居間で刺繍用の針がどこかにいってしまった、と言って探しまわっている。しばらく一緒に探したが見つからない。他の針を使うからいいわ、とそのままになった。みなは裸足で生活しているのだが。

1994 年 10 月 19 日（水）

ここの日常の食事はみなが適当に食べたいものやその時あるものを、好きな時間に食べるのが原則だ。朝食はメレがパン、牛乳、紅茶を切らさないように買っておくとみなが思い思いに食べる。食パンは少々厚切りにして焼かずにマーガリンを分厚くつける。紅茶にはミルクと砂糖をたっぷり入れ、パンをそれに浸して食べる。クラは時々、シリアルを食べている。これは高価で豪華な食事だが、彼は高血圧なので食事に気をつけているからだという。昼は食べないことが多いが、前日の残り物かタロイモかパンがあれば食べる。夕食は特別な時はウム料理、そうでない時は魚か鶏肉とタロイモだ。だからふつうは朝から晩まで澱粉とたんぱく質のみだ。大人から子どもまでタロは大好物で、消費量はすさまじい。

メレはよく床にあぐらをかいて食事をしている。床はリノリウム・タイルで、その上にココヤシ葉で編んだマットを敷いてある。そのマットの上を彼らは戸外と同じく裸足か靴で歩いているが、メレはマットの上に布巾を敷き、

一日の終わり

お皿を置いて食事をする。そしてその布巾で、洗った食器を拭いたり食べ物を包んだりする。

普段の食事ではナイフやフォークを使わず、両手を使って手で食べる。手にべったりつく食べ物も汁物も手でじかに食べる。もちろん食べる前に手を洗うわけではない。それでも病気するわけでもない。観光客対象のフィアフィアの時には水を張った洗面器を会場に置いてある。初めての時、私は食べる前に手を洗ったが、ニウエ人もパランギも食後に汚れた手を洗っていた。二度目からは私は食前にはそっとトイレに行って手を洗うことにしている。

夕暮れ時、集落を囲むココヤシの林を渡る風が葉をサラサラと鳴らし、静かに一日の終わりを告げる。そしてその後、夕日が空いっぱいに照り輝き、やがて森の向こうに沈んでゆく。

（1）了